
 学 会 記 事

第 220 回新潟外科集談会

日 時 昭和60年4月27日(土)
午後12時30分
会 場 医学部第三講堂
(病院入退院口前)

1. 総胆管壁に生じた断端神経腫の1例

奈良井省吾・大塚 為和(聖園病院 外科)
佐藤 康行・栗林 和敏(同 内科)
佐藤 利・渡辺 茂
鬼島 宏 (新潟大学第1病理)

胆石症手術後に総胆管壁に断端神経腫の生じた1症例を報告する。

症例は53才女性、17年前に胆石症にて胆嚢摘出術、総胆管切開術、T-チューブ外置術、乳頭切開術を受けた。今回、腹痛を主訴として入院。内視鏡的膵胆管造影法および経皮経肝胆道造影法を行うと、遺残胆嚢管と総胆管狭窄、そして、狭窄部位に上端を接する辺縁平滑な総胆管内に隆起した腫瘤の存在が明らかとなった。開腹し、総胆管切開を行うと、腫瘤は正常の胆管粘膜で被われていることが判明した。遺残胆嚢管と狭窄部位を含めて腫瘤を切除し、総肝管空腸吻合術を施行した。切除標本を見ると腫瘤は弾性やや硬で12×7×8mmの大きさであった。病理学的に腫瘤は多数の神経線維束が密に増生した結合織の中に埋もれるように存在する粘膜下腫瘍であった。免疫組織学的には神経組織特異蛋白であるS-100蛋白ならびにNeuron-specific enolaseが腫瘍中に陽性であった。断端神経腫と診断した。

2. 術前に診断しえた胆嚢胃瘻(特発性内胆汁瘻)の1例

斎藤 六温・植木 光衛(刈羽郡総合病院)
関矢 忠愛・吉谷 克雄(外科)

我々は最近胆石が原因と考えられる特発性内胆汁瘻の一種である比較的稀な胆嚢胃瘻の1例を経験した。当科における過去5年間の胆石症手術例は胆嚢結石192例、総胆管結石67例、肝内結石6例の計265例であり、腹部エコー検査の一般化により年々増加しているが、特発性内胆汁瘻例は本症の1例だけであった。症例は72才の女

性、心窩部・右季肋部・背部の痙痛を主訴に内科へ入院、胃潰瘍穿通の疑いで当科へ転科した。胃内視鏡・腹部エコーの所見より内胆汁瘻を疑い胃透視にて確診した。手術所見では胃前庭部前壁が炎症の強い萎縮した胆嚢底部に強く癒着し瘻孔を形成していた。瘻孔を切離し胆摘を行い胃穿通部は2層に縫合閉鎖した。萎縮した胆嚢内にはコ糸石が1ヶ存在した。術後経過は良好であった。特発性内胆汁瘻は胆道系手術例の0.4~13%の報告がある。胆嚢・胃瘻の頻度は特発性内胆汁瘻の4.3%とさらに少ない。今回我々は貴重な1例を経験したので報告した。

3. 当院における胆嚢癌摘除例の検討

広田 正樹・福田 稔(白根健生病院外科)
植木 秀功

過去5年間で当院で摘除可能であった胆嚢癌症例は13例であった。これら13例に対し検討を行ない若干の文献的考察を加え報告する。年齢は53才から81才で平均は68才であった。性別は男性3例、女性10例であった。胆石保有症例は9例(69%)であった。術前診断は胆嚢癌は1例で、他は胆石症又は胆嚢炎であったが、このうち4例は術中の摘出胆嚢の肉眼的観察にて胆嚢癌と診断し、一期的に治癒手術を施行した。手術々式は胆嚢摘除術7例、胆嚢全層摘除術1例、肝床楔状切除術5例であった。これら13例中12例は治療手術であった。予後は他病死2例を除いた11例中5例は再発の所見なく生存中である。

「結語」当院での胆嚢癌は胆石症の手術によって偶然発見されることが多いため、今後、胆嚢癌の術前診断に対するより一層の工夫が必要であり、無症状胆石症に対しても積極的に手術を施行し、胆嚢癌症例の発見に更に努力したいと思う。

4. 脾嚢腫の1例

武藤 経一・小山 善基(県立新発田病院)
北條 俊也・姉崎 静記(外科)
坂下 晃・渡辺 和夫

症例は35才女子、昭和59年3月3日胃集検で要精査となり、4月23日当院内科初診。胃X線像で胃上部大彎側の圧排所見があり、腹部CT及び腹部エコーで脾嚢腫と診断された。紹介されて6月18日当科入院す。6月29日手術施行、摘出脾嚢は大きさ14×13×10cm、重さ525gで、内部に7×6×5cmの嚢腫があって、更にその周囲を小嚢腫が囲んでいた。組織学的所見では、多房